

コラム 緑化植物 ど・こ・ま・で・き・わ・め・る

チカラシバ (*Pennisetum alopecuroides* (L.) Spreng.from.*purpurascens* (Thunb.)Ohwi)



東村ユミ子 (第一緑化工業株式会社) first2@galaxy.ocn.ne.jp

チカラシバはイネ科チカラシバ属の多年草⁹⁾で、日当たりのよい草地にふつうに生え²⁾、ひげ根を張り大株になる。根が強く、引き抜こうとしても抜けないのが名の由来⁹⁾である。道ばたによく見られる⁴⁾ので、別名ミチシバとも呼ばれる⁹⁾。北海道から沖縄²⁾、東アジア・インドネシアに分布する⁷⁾。花期は8~11月²⁾、果期は9~12月⁴⁾である。

茎は叢生し、高さ50~70cmになる。葉は長さ30~70cmの線形で、基部は葉鞘となる。根生葉の基部は紫色²⁾で葉の表面はざらつく。花茎の先に長さ15~20cmの試験管ブラシのような花穂をつけ、暗紫色を帯びた剛毛のある小穂が密生する⁹⁾。エノコログサ (*Setaria viridis*) も似たようなブラシ状の花穂をつけるが、穂先が垂れる。チカラシバの花穂は円柱形で直立する⁷⁾。果実が成熟すると、次第に軸から剥離し⁴⁾、人の衣服や動物の体などについてあちこちに運ばれる¹⁾。

子供の頃、チカラシバの葉を結び合わせ、足を引っ掛けるための罫を作って遊んだという話は、身近に見られた植物ということと、根の強さを表しているエピソードである。

チカラシバは地域性種苗を利用した法面緑化に使用された例がある⁶⁾。弊社では圃場でチカラシバの栽培を行い、種子を公共事業の法面緑化工事で使用した。

種子はブラシ状の花穂をこそげば容易に採取することができる。先に記述したが、果実が成熟すると小穂が軸から剥離するため、採取時期を逸すると種子が落下してしまうので、その点は注意が必要である。

チカラシバは倉田らが1969年より約半世紀にわたって東京農業大学で行っていた、長期間室温で乾燥貯蔵した在来草本種子の発芽試験で、供試植物の一つに選ばれている。中村

らは、貯蔵後7年目に最高発芽率96.0%を記録し、当初の発芽率を長期的に維持し徐々に減衰するタイプと述べている⁵⁾。

このように、常温で長期間にわたって種子の貯蔵が可能であるということは、低いコストで種子を利用できるということであり、緑化で広く利用するために有利な条件⁵⁾である。

しかし、西日本から北関東の放牧地においては、強害雑草の一つ³⁾とされている。これは出穂するとブラシ状の穂を持ち、放牧家畜にほとんど採食されなくなることや旺盛な種子繁殖力によって急激に増加するため⁸⁾である。

チカラシバは地域性系統のイネ科草本の一つであり、根の強さが特徴で、法面での土壌緊縛力が期待できることなどの利点がある。近隣に放牧地がないことなど導入する地域を限定するなどの注意は必要になるが、緑化で広く利用されることを期待する。

引用文献

- 1) 曳地トシ・曳地義治 (2011) 雑草と楽しむ庭づくり, 築地書簡, p.50.
- 2) 日野 東 (2002) 日本の野草・雑草, 成美堂出版, pp.464.
- 3) 井村毅・須藤まどか・山田明央 (1998) チカラシバ侵入荒廃草地の重放牧による植生改善—チカラシバ抑制に効果的な放牧強度の目安—, 日本草地学会誌, 44(別): 330-331.
- 4) 岩槻秀明 (2009) 街でよく見かける雑草や野草のくらしがわかる本, 秀和システム, pp.430-431.
- 5) 中村華子・宇津木栄津子・橋隆一・福永健司 (2009) 長期間乾燥貯蔵した在来木本種子の発芽率推移, 日本緑化工学会誌, 35(1): 95-98.
- 6) 成井伸司 (2007) 郷土種による法面緑化の取り組みについて, 林道, 44(8): 175.
- 7) 佐竹義輔・大井次三郎・北村四郎, 亘理俊次・富成忠雄 (1982) 日本の野生植物 草本 I 単子葉類, 平凡社, p.101.
- 8) 高橋俊・高橋繁男 (1999) 異なる採食圧を想定した刈取条件下におけるチカラシバの種子繁殖と生産性, 日本草地学会誌, 45(別): 66-67.
- 9) 多田多恵子 (2009) 里山の植物ハンドブック 身近な野草と樹木, 日本放送協会, p.164.



写真-1 チカラシバ種子を使用し緑化した法面



圃場の様子(6月)



結実初期(9月)



成熟期(10月)